

✧ 研究会報告 ✧

【研究会】海外神社をつくる—神社以前から幻の計画まで

日時：2024年1月20日（土）13:00～16:00

会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス ☆ ZOOM 同時開催

「最後期の海外神社 拡大・創建・計画」

発表：稲宮 康人（非文字資料研究センター 研究協力者）

「入植者の馬來半島大神宮から南方軍の 昭南神社に至るまで」

発表：大澤 広嗣（宗教学専攻 文化庁宗務課専門職）

稲宮 康人（非文字資料研究センター 研究協力者）

松山 紘章（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）

研究会発表「最後期の海外神社 拡大・ 創建・計画」

稲宮 康人

展示と併せて企画した研究会で、「最後期の海外神社 拡大・創建・計画」というテーマで発表を行った。海外神社の歴史を調べるにあたって、1941年発行の『大陸神社大観』（大陸神道聯盟）が基本書の一つになっている。しかし、それ以降、敗戦までの歴史は分からないことが多い。また、この本がカバーしていない地域の海外神社についても、不明な時期が多くある。今回は、『「神国」の残影 海外神社跡地写真記録』の各神社解説をベースに、新たに分かったことを加え発表を行った。タイトルの「最後期の海外神社」は、大体日中戦争以降の時期とし、拡大では、樺太神社の建て替えや外苑の増設など、創建では、関東神宮や新郷神社など、計画では興亜神宮や香港神社などの事例をあげた。建国神廟のように、拡大と計画の双方にまたがるものもあった。以下、それぞれの概要を述べる。

海外神社の拡大

紀元二千六百年（1940年）を機に、既存の海外神社を拡充しようとする動きが各地であった。代表的な例として樺太神社がある。樺太神社と樺太護国神社は、豊原市街を見下ろす神社山山麓にあったが、紀元二千六百年を記念して外苑、中津宮、上津宮（神籬）の整備と、社殿の建替えを決めた。上津宮は、神社山上部に適当な石があったので、それを神籬にした。これを決めたのは、樺太神社造営調査に訪れた角南隆であった。外苑と新社殿は完成しなかったようだが、詳細は不明。『非文字資料研究センター News Letter 43号』に2019年の展

示で使ったパネルを掲載してあるので、そちらをご参照いただきたい。

紀元二千六百年に南洋群島の総鎮守としてパラオに鎮座した南洋神社には、広大な外苑を造営する計画があった。この後、南洋群島全域が戦場になったこともあり、この計画がどれほど進んだのかは不明。戦後、米軍が撮った航空写真を見ると、何もしていなかったようである。

海外神社の創建

関東州の総鎮守として、旅順に関東神宮が造られた。1944年に鎮座。旅順には、旅順金毘羅神社から改称した旅順神社、白玉山納骨祠を改めた白玉山忠霊祠もあったので、地域の総鎮守、都市の神社、護国神社の3社が揃う都市になった。各地域の首府、朝鮮・京城（現ソウル）、台湾・台北（現台北）、樺太・豊原（現ユジノサハリンスク）、満洲・新京（現長春）にもこの3社があり、植民地中心都市には3社が建ちならぶことが当たり前になっていた。

日本軍の占領後、軍政当局は多くの都市で都市計画を策定した。その中には神社造営が含まれた計画もあった。例えば、華中の都市新郷では、新郷旧城市の外側に軍主導で新市街を作る計画があり、新郷神社とそこに隣する巨大な忠魂碑の建造はその一環でなされた。北京神社は、当初、北京城外に新しい都市として計画された西郊新市街内に造る予定だったが、治安上の理由で城内の貢院跡地に鎮座した。済南では、軍の占領機関である済南特務機関が主導して都市計画を策定し、新市街建設と同時に済南神社創建が進んだ。北京、済南の両神社については、『非文字資料研究センター News Letter 49号』に地図等掲載しているので、ご参照いただきたい。



海外神社の計画

朝鮮の扶余に、朝鮮神宮に次ぐ第二の官幣大社として扶余神宮を造る計画があった。朝鮮総督府の一押し事業で、かなり造営が進んだが、鎮座には至らなかった。満洲の新京（現長春）では建国神廟の移設計画があった。郊外の浄月潭とその周辺の山岳地帯全てを神域にする予定で、完成後には満洲国民全てが建国神廟を参拝することになっていた。本殿予定地に目印の木標を建てたが、造営まで至らなかったようである。当時満洲で造園に関わっていた佐藤昌によると、新京から浄月潭までを結ぶ距離 10 km、幅 100 m くらいの参道をつくれ、という指示があったという（図 1）。紀元二千六百年を記念して、奉天（現瀋陽）郊外にある東陵背後の丘陵に興亜神宮を造営する計画があった（図 2）。東陵は満洲国皇帝



図1 佐藤昌〔述〕環境緑化新聞社編『佐藤昌と近代公園緑地の歩み』日本公園緑地協会、1991



図2 『満洲日日新聞』1939年12月27日

溥儀の祖先、清の太祖ヌルハチを祀る陵である。その東陵を含め、神宮の外苑にする計画だったようだ。香港には、今の動植物公園あたりを予定地にして香港神社を造る計画があった。元樺太神社禰宜の政所喜澄が神社造営準備に励んだが、彼の病没後、頓挫したようである。

最後期の海外神社をみてゆくと、紀元二千六百年や軍の占領などを機に動きだしたものが多い。紀元二千六百年記念事業は外地等でも数多く企画されたが、戦争の進展から立ち消えになったものも多かった。また、占領地では、軍の意向から造られた神社が数多くあった。大日本帝国の最後期も、海外神社の活動は止まることがなかったと言えるだろう。

「入植者の馬來半島大神宮から南方軍の昭南神社に至るまで」

松山 紘章

はじめに

今回の報告は大澤広嗣氏が研究する日本宗教（特に仏教）のアジアでの関与についての成果である。報告では現在のマレーシアにあった馬來半島大神宮からシンガポールの新嘉坡大神宮、昭南神社、昭南神社の順序で各神社の連続性を明らかにした。また鍵となる人物に馬來半島大神宮建立者の永田弥八郎を挙げた。以下、大澤氏の報告に沿って要旨を記す。

各神社の沿革

太平洋戦争中の大日本帝国占領下の昭南（現シンガポール共和国）には昭南神社が建っていた。大澤氏によると昭南神社の前身になる神社は矢野暢『「南進」の系譜』（中公新書）（以下矢野）の著書で知られていた。大澤氏は矢野の著書には重大な誤記があり後学の研究に混乱が生じているという。矢野の著書にある誤りを訂正することも報告の目的とした。

大澤氏はマレー半島・シンガポールの神社史は、黒住教信者の永田弥八郎（以下永田）が建てた馬來半島大神宮が始まりと位置づける。その理由は太平洋戦争時下に南方ブームが起きて真如親王（高丘親王）の物故地「羅越国」が話題になった。シンガポールが真如親王の物故地と考えられた。作家濫澤龍彦の著書でも知られている。昭南神社の前身となる馬來半島大神宮は英領マラヤのスランゴール州（現マレーシア）にあった。馬來半島大神宮は1917年に永田の経営する永田護謨園に竣工した。しかし、馬來半島大神宮を建てた永田は黒住教の信者ではあるが教師資格はなかった。その後、永田はゴム園経営と宗教活動を終えて同じ英領のシンガポールへ移住した。

永田は1922年にシンガポールで新嘉坡大神宮を創

建した。新嘉坡大神宮は市街地北方の大平源四（新潟県出身）が経営する大平護謨園にあった。永田が初代宮司となり亡くなった後は千々和重彦（以下千々和）が二代宮司に就任する。千々和は社家の家系であるが、初代宮司と同じ永田姓を名乗り永田重彦とした。永田と千々和に血縁関係はなかった。

新嘉坡大神宮は1939年又は1940年に昭南神社と改称した。千々和が宮司を継続していた。神社名の改称後、昭南神社が建つ大平護謨園の権利を永福虎（鹿児島県出身）が取得した。新嘉坡大神宮の社殿は市街地から遠いため、シンガポールにあった日本人倶楽部横に飛地境内地が設けられた。

飛地境内地の名称は「昭南神社榎宮」とシンガポール日本人会の記録にある。記録では「のぎへん」の「榎」を使い榎宮（しんぐう）となっている。大澤氏は当時のシンガポールには新潟県出身者が多く暮らしていたので、新潟市西蒲区の榎神明宮（巻神社）にあやかり「榎」を使う「昭南神社榎宮」（まきぐう）ではないかと推定する。



南方占領地切手（左）昭南神社（右）昭南忠霊塔
（マライ軍政部郵政局、1943年発行。大澤広嗣氏提供）

昭南神社は1942年に日本軍のシンガポール陥落後に昭南神社と改称する。第25軍司令官の山下奉文陸軍中将が新規の社殿建立を立案して新しく昭南神社が建てられた。

矢野暢氏の『「南進」の系譜』の誤記

大澤氏は矢野の『「南進」の系譜』の誤記について、矢野は馬來半島大神宮を創建した永田は基督教に長く関わっていたと書かれている。おそらく矢野が新嘉坡大神宮の二代宮司の千々和に話を聞いた際に「教会」を黒住教の教会ではなく、基督教の教会と早合点した。矢野は千々和の「教会」（教会所）という呼称を仏教や神道では使わないと思っていたようだ。

矢野は「しょうなん」の表現の由来は千々和としている。千々和が昭南神社に改称した時に「昭南神社」の扁額を彫り掲げたことが理由であった。大澤氏は矢野について話を大きく盛る傾向があり、千々和の証言を全面的に信じたのではないかと考えている。

大澤氏は「しょうなん」の表現の由来は1928年に

海軍大将の財部彪が新嘉坡大神宮に奉納した「皇威昭南洋」の扁額であったとする。

馬來半島大神宮から新嘉坡大神宮、昭南神社へ

永田は現在の長崎県島原市出身である。父祖の代から黒住教を信仰していた。永田の出身地には1908年から1918年頃に黒住教島原教会所があった。大澤氏は島原市の永田の出身地域に行くが永田姓の家は確認できなかった。

永田の父・永田弥吉の名前が島原市温泉熊野神社の「神輿奉納表」に残されている。永田家は先祖代々神々に仕える敬神的な家柄であった。

永田は早くに父を亡くした。その後は事業に失敗、財産も尽きて米国行きを決意した。1910年に上海へ渡り米国渡航の機会を待つが行先を変更した。1911年に香港経由で英領マラヤのシンガポールに着き、スランゴール州フルスランゴール郡クアラクラブ（現マレーシア セランゴール州クアラクラブバル）に至る。ゴム栽培に従事後、1913年にクアラクラブ北西のキルリン村でゴム園を買い個人で経営していた。当時永田は「永田伊勢之助」とも名乗っていた。永田が信仰する黒住教の主祭神で、伊勢神宮の内宮で祀る天照大神を意識した名前であった。

1912年に永田が構想した馬來半島大神宮はクアラクラブの市街地西方であった。永田は現地の活動状況を黒住教本部に手紙を送り報告した。黒住教の機関誌には手紙や施設の口絵が載り、黒住教も永田の活動に注目していた。1916年に黒住教の機関誌に載った続報では、第一次世界大戦の影響や日本建築に詳しい人がいない等の困難が書かれていた。施設は設計変更もあったが大正天皇の御大典で着工して1917年には一部が完成した。永田や馬來半島大神宮の名は日本とマレーシアの公文書に残されている。

その後、永田が移住したシンガポールに建てた新嘉坡大神宮は1922年2月11日に社殿が落成して遷座祭を行った。永田は1934年11月に没するが、同年12月には千々和が福岡県から来て宮司を継承した。

大澤氏は正確な時期は確認中とするが新嘉坡大神宮は1939年又は1940年に「昭南神社」に改称したと考えている。また、新嘉坡大神宮が建っていた大平ゴム園の経営者である大平源四の出身地の新潟県魚沼市干溝を訪ねたが子孫は確認できなかった。

昭南神社への改称と移転拡張

日本軍によるシンガポール占領後に造営した新しい昭南神社は第25軍司令官の山下奉文陸軍中将（以下山下）の立案であった。マレー半島を平定できたのは神様のおかげとして昭南神社と昭南忠霊塔の建設が始まった。山下の立案が載る『軍政下ニ於ケル宗教政策ノ経過』という公文書は渡辺樸雄（以下渡辺）が作成した。



昭南神社跡地（大澤広嗣氏提供）

昭南神社の建築様式は神明造であった。その設計は落藤藤吉（以下落藤）が担当した。落藤は広島県出身で東京帝国大学を卒業後、北海道帝国大学の営繕課の技師などを務める。徴兵されると工兵第五連隊に入隊した。入隊後は専門的知識があるため社殿の設計を任された。

渡辺は曹洞宗の僧侶で太平洋戦争後は鶴見大学の学長を務めた人物である。渡辺は駒澤大学の教授の時に学内での内紛があり辞職後、昭南特別市初代市長の大達茂雄（以下大達）の依頼で陸軍司政官になった。宗教調査に関わり『軍政下ニ於ケル宗教政策ノ経過』を作成した。

大達は島根県の浜田町出身（現浜田市）で東京帝国大学卒業後は内務省に入省、1942年から1943年まで昭南特別市市長となった。渡辺とは同郷で浜田中学校の先輩・後輩の間柄であった。大達は宗教に敬意を持ち昭南特別市には宗教の専門家が必要と考えて渡辺を招聘した。

昭南神社の敷地には外苑、運動場や絵画館等も計画された。敷地に選ばれた場所は伊勢神宮内宮の西端を流れる五十鈴川の風景に近いためであった。現在、昭南神社が建立したマクリッチ貯水池は自然保護区になっている。

昭南神社では創建時の南方ブームで真如親王を祭神にする動きも見られた。しかし、真如親王が皇族出身の僧侶のため、神社へ奉ることに疑問があり祭神にはならなかった。

昭南神社への奉納に関して、画家の橘天敬（当時は園部香峰と称する）は真如親王図像を描き奉納したとされる。大澤氏は作品を管理する橘天敬の娘に確認するが図像は現存しないとされた。昭南神社の終わりとともに図像も無くなったと考えられる。また奉納刀が1996年発行の美術雑誌に掲載があり、誰かの手で保存してい

るようだ。

昭南神社の初代宮司には、石川県で神社の宮司や福岡県祭務官を経験した中村春雄が就いた。奉職した人物に解脱会創始者の甥である岡野武徳がいる。

まとめ・質疑応答

矢野は『「南進」の系譜』で新嘉坡大神宮の二代宮司千々和の話を聞き「しょうなん」の由来を鵜呑みにしていた。また、千々和が独断で「昭南神社」に改称したことが、日本軍によるシンガポール占領後の「昭南島」の由来になったとする。

小笠原省三（神道学者）は著書で1928年に平原文三郎中佐が財部海軍大将の扁額を持参して奉納したと紹介している。吉岡利起の著書では昭南神社の社殿に「皇威照南洋」の扁額が掲げられていたとある。大澤氏は1928年には扁額が掲げられて、どこかのタイミングで現地の日本人会が改称したと推測する。

昭南は祭祀・宗教・顕彰の聖地で昭南神社、昭南忠霊塔、真如親王の施設があった。真如親王は当時の南方ブームもあり「高僧」「皇族」「南方」の要素を持ち、昭南のシンボリックとなった。1943年には彫刻家の長谷川塊記が建立目的に真如親王のプロトタイプを制作したと新聞に載っている。

長崎大学の大平晃久氏の研究によると昭南を神道・仏教・英霊・イスラームの聖地化する目的があった。大澤氏は昭南から想起するのは、明治維新後に東京の宮城近くに伊勢神宮など聖地を集約しようとした動きと同じとする。

大澤氏は課題を5点挙げた。1. 新嘉坡大神宮から昭南神社の改名時期が定かではない。2. 永田が新嘉坡大神宮の初代宮司に就任した時期。3. 新嘉坡大神宮のゴム園の経営が大平源四から永福虎に代った時期。4. 昭南神社の飛地境内地にあったのは「昭南神社榎宮（しんぐう）」なのか、それとも「昭南神社榎宮（まきぐう）」なのか。5. （太平洋戦争）開戦後に旧・昭南神社（昭南神社）から新・昭南神社になった際、御神体が一時的に昭南特別市庁舎の屋上に奉斎されたが詳しいことは分かっていない。

大澤氏の報告では質疑応答も行われた。参加者からは永田と黒住教の関係、現地の人々の神社への認識、昭南神社の終わり方などの質問が出された。

本稿を作成するにあたり大澤広嗣氏から写真を提供していただきました。感謝いたします。